

令和6年度 いのちの授業 事例集（幼稚園こども園）【その他】

	地区	学年	教科等	テーマ	内 容	参考事項（講師・教材等）
1	相模原市	幼複合	その他	防災訓練	防災訓練を実施した。いつもの訓練とは違い、消防署員の方が来られていたため、さらに緊張感をもって参加する姿が見られた。日常から訓練は重ねているため、命を守る為には職員の話をしっかり聞いて行動することは理解している。職員が消火器を使うところを見たり、消防署員の話を聞く中で、火事の恐ろしさや、防ぐためにはどのような行動を取ったらいいのかなど、訓練を通じて理解する姿が見られた。訓練後も楽しかったと話し合う姿と同時に、災害時には先生の話の聞かなくてはいけない等の話も聞こえた。	消防署員と共に訓練の実施及び講話
2	中	年長	その他	蚕の飼育	卵の状態から蚕の飼育を始め、桑の葉を食べて皮を脱いで大きくなっていく様子を観察した。「葉っぱをたくさん食べてるね」「うんちもたくさんしているからお掃除しよう」と気付きを共有し、世話をする姿が見られた。優しく掴んで掌に乗せたり、じーっと見て動きを観察したりすることで、愛情をもってかかわっていた。蚕が繭になり始めると、「この後、蛾になるんだよね?」「どうして蚕さんは糸を作ってくれるんだろう?」と、生態に不思議さや疑問を感じたり、自分たちの生活の一部になっているということに気付いたりしていた。小さな生き物の世話を通して、命を大切にすることが育っていた。	絵本「かいこ」
3	中	年長	その他	野菜、花の種採り活動	園で様々な野菜や植物を育てている中で、野菜や花からできた種を採った。採れた種は種類ごとに分け、袋に詰め、地域の方やお世話になっている方を招待する感謝祭という園行事で配った。「たねや」という看板を作り、お店ごっこをしながら種を渡し、地域の方や様々な世代の方と触れ合って過ごすことができた。野菜や植物の育ちを観察したり、収穫したりするだけでなく、その後にはできる種がまた野菜や植物の始まりであることに気付くことができた。	オクラ、コスモス、マリーゴールド
4	中	年長	その他	手話にふれる	いろいろな人とのコミュニケーションをとる方法のひとつとして知ってほしいと考え、手話を保育の中に取り入れ、挨拶や歌に合わせて等生活の中で楽しみながら行っている。関心をもち自分の名前を手話で覚える子がいたり、歌で覚えた手話を遊びの中で使ったりする子もいる。幼稚園での手話をひとつのきっかけとして、気持ちを伝え合う手段は様々なことを体験を通して知り、将来、コミュニケーションの多様性を理解し受け止めたり、豊かな人間関係を築いたりすることへとつながっていくようにしていきたいと考えている。	

5	中	年中	その他	ミミズについて サークルタイム で話す	ある日、一人の子がテラスにいるミミズを見つけ、友達を呼んでくる。その様子に気がつき、続々と子ども達がテラスに出てきて興味をもって観察していた。 その後、『テラスにいたミミズについて』、サークルタイムの時間をもつ。その中で「ミミズにフーってしたら動いた」「ミミズにフーっと息を掛けたらかわいそうじゃないかな」「ミミズ、びっくりしたかな」「ミミズ、見たかったんだもん」等、自由に言葉を交わし、生き物の気持ちを考えたり接し方について考えたりする姿が見られた。自分の感じたことを話したり、友達の話进行を聞こうとすることで、いろいろな角度から生き物のことを考えることができた。	
6	中	年少	その他	命の大切さについて	男児Hは、日頃より大人の気を引こうとする行動がみられている。甘えやしてほしいことなどを素直に言葉にすることができず、暴言を吐いたり危険な行動をあえてとり、自分を見てほしいという思いがある。ある日も、パジャマ袋を自分の首に巻き付けていたため首が絞まる可能性があり、危ないことを伝えると「息ができなくなってもいい」「苦しくなりたい」と言う。理由を聞くと「救急車に運ばれたいの。H君は苦しくなってもいい」と答える。3歳児ではあるが、このような言葉を口にするこことで、保育教諭が引き留めてくれることを理解している。本児の思いを受け止めた上で、保育教諭の考えや、本児の存在が大切であること、それが担任だけの思いではなく、職員皆の思いであることを伝えた。さらに、日々の関わりの中でスキンシップを取ったり、肯定的な言葉で関わったりすることを心掛けると、少しずつ素直に自分の思いやしてほしいことを保育教諭に伝えられるようになった。休み明けなどは、不安定になるものの、穏やかに過ごす日が増えている。これからも本児のありのままの姿を受け止め、愛情深く関わりながら、Hが自分が愛されていると感じ、自分を大切にできるよう関わり続けていきたい。	
7	中	年長	その他	大好きなココア君	5歳児に進級し、うさぎの飼育当番をするようになった。個別支援が必要であるH児はうさぎの世話が好きで、撫でたり、餌をあげたりしてかわいがっていた。うさぎは年老いていたため、11月7日に亡くなる。うさぎの死をクラスで伝え、皆でうさぎにお別れをした時はH児は何が起こったのかが分からず、ボーっとしていた。“死”ということがどういうことなのか分からず、「ココア君(うさぎ)はまた来るんでしょ」と何度も聞く姿が見られた。そのため、保育教諭が「死んでしまったらもう会えなくなってしまうんだよ」と繰り返し伝えたが、意味が分からない様子だった。しかし、担任保育教諭や他の幼児が泣いている姿を見て、驚いたのか保育教諭に「大丈夫だよ」と言ったり、頭を撫でたりする姿が見られた。 翌日、うさぎの飼育に使用していたものが運び出される様子を見たH児は、担任保育教諭のそばに来て、「大丈夫だよ」「お空で見てるから」と一生懸命に言葉を掛けてきた。H児にとって「死」を理解することは難しいようであったが、うさぎの死を通して、悲しみを感じた担任に対して、気持ちに寄り添おうとする姿が見られ、心動かされる経験につながったのではないかな。	

8	中	年少	その他	飼育	戸外で遊んでいると一人の幼児が「先生、カエル！」と知らせてきた。幼児と一緒に捕まえてバケツに入れていると、その様子に気づいた友達が見に来る。「これはアマガエルだよ」「水がないとダメじゃない？」など、それぞれが知っている知識を伝え合う。生き物の生態に関心をもつ機会になればと思い、幼児と共に図鑑で調べていたが、片付けの時間になりカエルをどうするか話し出す。「捕っておきたい」「逃がしたくない」という意見が多い中、一人の幼児が「逃がしたほうが良いよ」と話す。「ちゃんとした入れ物がないとダメでしょ」「食べ物もないよ」など飼育環境が整っていないことを友達に知らせたため、他児にも問いかけた。すると、生き物の気持ちに寄り添って考え始め、逃がすことに決まる。生き物も命がある存在であることや命の大切さについて考える機会となった。	
9	中	年長	その他	飼育	自分たちで野菜を栽培することで、野菜に興味をもち、育っていく過程を知り収穫する喜びや楽しさを味わって欲しいと願い、野菜の苗を1人1本、育てることにした。6月頃になると葉に虫がついていることや黄色や白になっていることに気づき、図鑑で調べ病気になることを知り対処法を見つけていった。虫はコーヒーを霧吹きでかけたり、アルミホイルを巻くといなくなると知り実践していった。数日様子を見て虫が少なくなると喜んでいった。実がなると「虫にたべられなかった。よかった。」などと喜び収穫をした。また、「自分で育てたから食べてみる」という姿もあり、自分で育てたことで野菜に興味をもち、生長し収穫する喜びを味わう経験となった。	
10	県西	年中	その他	カブト虫の飼育をとおして	幼虫を見ることが初めての子もいたが、幼虫は暗い所が好きで土が乾いたら霧吹きをしてうんちが出たら取ってあげるなど世話の仕方を伝え、毎日観察し世話をしていた。少しずつ成長していく過程を見る事で、カブト虫への興味関心も大きくなり、遊ぶ場にも持っていくほど大切にしていた。成虫になるとようやく自分たちの知っているカブト虫の姿に大興奮していた。友だちの、カブト虫も観察し「〇〇ちゃんのカブト虫になったよ」と伝え合う姿もあった。成長したカブト虫をどうするか話し合うと、「大好きな木に放してあげる」とみんなでどこの木が喜ぶか探して決め放した。カブト虫が木に登っていく姿をいつまでも声をかけながら見つめていた。飼育課程で亡くなってしまったカブト虫もいて生き物には命があること、命について考える経験もできた。	
11	県西	年中	その他	青虫が羽化する過程を観察して	一人の園児が家庭からあおむしを持ってきてくれたのでクラスで育てることにした。進級当初からクラスでは、はらぺこあおむしの絵本を毎日読んでおり、成長を楽しみに毎日観察した。毎日登園するとすぐに様子を見に行く子もおり、大事に育てていた。ある日戸外遊びを終えて保育室に戻ると蛹が羽化していた。子どもたちは蝶の周りに集まり、ゆっくり羽を動かす蝶をじっと観察した。「この子が飛べるようになったらどうしようか？」と保育者が問いかけると、ほとんどの子が「おうちに帰してあげたい」という声が多かった。夕方になっても飛び立つことはなかったが、子どもたちと話し合い、蝶がとまれるように花の上にかえた。翌日の朝の会で蝶の話題を出すと「もう花の上にはいなかったよ」「きっとおうちに帰れたんだ」と嬉しそうな表情を浮かべていた。愛情をもって生き物に関わる良い経験が出来た。	絵本 「はらぺこあおむし」

12	県西	年長	その他	小さな命をかわいが る気持ち	園庭の草花の葉の上に、いろいろな種類のイモムシが乗っていることを子どもたちが発見した。さっそく飼育ケースに入れて観察をしていると、突然イモムシが頭を上げて左右に振り始めた。びっくりしている子どもたちに、教師が「みんなに『こんにちは』って言ってるんじゃない？」と言った。すると「会えてうれしいって言っているのかな？」「踊りが楽しいんじゃない？」と思ったことを伝え合っていた。その後「イモムシになりたい！」と言って製作コーナーで材料を選び、イモムシのお面や衣装を作ったり、「イモムシさんにお手紙を書く！」と言って、イラスト付きの手紙を書いて飼育ケースの前に置いたりして、イモムシへの思いを表現していた。また、教師と一緒に図鑑で調べ、イモムシが頭を振る行動の意味を知ることができた。	
13	県西	年長	その他	動物の命を大切 にする気持ち	園庭の畑で育てているキャベツの葉をアオムシが食べ、葉にたくさんの穴が開いていた。子どもたちと考え、アオムシが食べるためのキャベツを別に植え、畑から引っ越しさせることにし、毎日見つけてはアオムシ用のキャベツの葉の上に乗せていた。そのようなことをしていた頃、地域の方の畑でみかん狩りをさせていただく機会があった。その畑には害獣用の電気柵が張られていて、地域の方が「山からシカが来て畑の野菜を食べちゃうんだ。野菜を守るために柵を張ったんだよ」と子どもたちに話してくれた。するとA児が「それならシカさん用に野菜とか葉っぱ（木）とかを植えてあげればいいんじゃない？」と言っていた。A児はアオムシを引っ越しさせたことを思い出し、シカも食べ物を食べられるように考えたようだ。地域の方も「そうか！」と受け止めてくださった。このような気持ちが、人間が動物と共生しようとする思いの基盤になるのではないかと考えた。	